


生きる日常を訪ねる
アーティストたちが
学芸員、
アーティストたちが
今後の展覧会に向けて現地調査へ。
各国作家との交流やアジア美術の現在を4チームがレポートします。
アジア視察滞在記

CHINA

Team 01

佐々木玄太郎 (収集展示係)



上海中心部のレトロな街並み。一階はタバコ・酒・野菜などのお店。



上海ビエンナーレへ。世界との多彩な交わり方を示唆する作品が多数出展。



「AI時代における芸術の自己検証」を掲げた企画「Meme to Jam 2.0」



ユーレンス現代アートセンターにて所蔵作家であるヤン・フンドン(楊福東)の個展へ。タイトル「香河」は作家の故郷の地名。



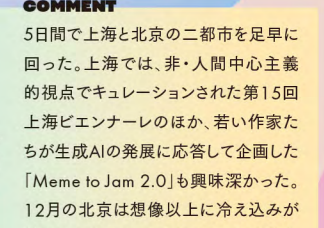
北京にて、キュレーター・フォン・ボーイー(馮博一)の2000年度レジデンス研究者の案内で798芸術区をめぐる。



中間美術館の館長キャロル・インホール(盧迎華)と。第8回横浜トリエンナーレのディレクターも務めた方。



日本でも少し流行った蘭州ラーメン。冷え切った体に沁みたる一杯。



中国のWi-Fiパスワードはだいたい8が8つという事実。

BANGLADESH, PAKISTAN

Team 02

五十嵐 理奈 (収集展示係)・秦原 ふみ (交流・教育係)



世代を超えて! レジデンス作家先輩(右から3人目: コピル・アフメッド・マサム・チスティ)と後輩(左端: モハメド・フォズレ・ラッピ・フォティック)の初対面



メトロの橋脚に描かれた2024年7月の反政府運動の壁画



写真ビエンナーレの「第11回 チョビ・メラ」はガザ侵攻や難民など時事的なテーマ



パニ・アビディ(所蔵作家)がキュレーションのチョビ・メラ会場。



32年続カラチの美術家による組織「VASL」の若手メンバーと。



デコトラが有名なパキスタンでは、馬も「デコ馬」に!?



ムガル帝国時代の面影を残すラホール。祝日は沢山の人が賑わう。



ラホールの国立美術大学 細密画科の授業風景。具殿をパレットに使うのが素敵。

COMMENT

8年ぶりのバングラデシュ。この間にメトロ、高速道路が建設され、2024年には学生たちによる反政府運動が起き、都市風景もアートをめぐる環境も様変わり。選挙直前の1月未は、先行きの不安を抱えながらもテーマを模索し、発表機会を探す作家の姿があった。一方、港街カラチでは新旧アートコレクティブを訪ね、若手の台頭と継承を感嘆。古都ラホールでは伝統の細密画が現代美術として今も進化中。街は約20年禁止されたバサント(相手の尻を落とす風あげ大会)復活を控えお祝いムード一色。前日に帰国したのが唯一の心残り。いつか観てみたい!

THAILAND, SINGAPORE, LAOS, CAMBODIA

Team 03

中尾 智路 (交流・教育係)
椛橋 彩香 (収集展示係)



タイランド・ビエンナーレinプーケット。ガイドさんが付きっきりで解説。



2013年度レジデンス作家のチェン・サイ・ファクアンと再会。



福岡アジア美術トリエンナーレ(2014年)出展作家 プンボール・ポーティザンと。ベトナム戦争で使われた爆弾の残骸で作品を制作中。



移動中に見たラオスの夕日。のどかな風景に調査の疲れも癒された。



人生でいちばんおいしかったソムナム、ラオスの路上で出会う。



カンボジア、プノンペンでのガイドは2018年度レジデンス作家のリム・ソクチャンリナ。



昨年12月に開館したばかりのDib Bangkok。あじび所蔵作家ビナリー・サンピタックの作品発見!



アリン・ルンジャンに教えてもらったパンコクのある寺院。間違えられた扉の奥には...! 僧侶がスマホ翻訳で詳しく教えてくれた。

COMMENT

東南アジア4か国5都市を10日間でまわるというハードスケジュール。プーケットとシンガポールではビエンナーレを視察、ラオスとカンボジアでは過去のトリエンナーレ出展作家やレジデンス作家と再会。美術学校やギャラリーにも足を運び、若手作家とのつながりも生まれました。新しい世代の作家を探すと同時に、これまであじびが築きあげてきた歴史をたどるような調査旅行になった。作家と一緒に現地のごはんを食べるといった調査の醍醐味。ブンボール・ポーティザンのアトリエで飲んだ直飲みココナッツのことは忘れない。

INDIA, SRI LANKA

Team 04

中尾 智路 (交流・教育係)
佐々木玄太郎 (収集展示係)



国立近代美術ギャラリー。庭には犬や人が寝ていた。



デリーの夜の市の露店。あれもこれも山盛り。



デリーのアートフェアに合わせて各所で企画展示が自押し!



ゴージャスな服をたくさん着込んだ神様。街のヒンドゥー廟にて。



インドアートフェアで、福岡アジア美術トリエンナーレ(2014年)出展作家のブラバカル・パーチュプターに再会!



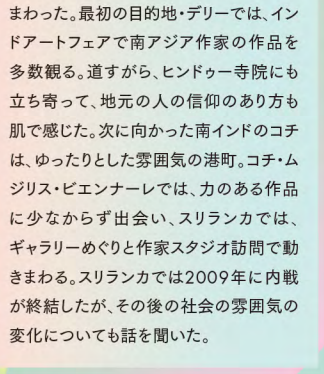
一度見ると忘れられない顔。あじび所蔵作家のラヴィンダル・レディの作品。コチにて。



コロンボのギャラリーで、ミャンマー美術研究者のナタリー・ジョンストンさんから話を聞く。



コロンボ近郊で、所蔵作家のバーラ・ボットピティヤのスタジオを訪問。多彩な素材を使ってモリモリ制作中。



ソウ・オン・ザ・ロード!

カレーとカレーとカレーとカレー。

花柄シートのオートリキシャ。

COMMENT

10日間でインドとスリランカの計3都市をまわった。最初の目的地・デリーでは、インドアートフェアで南アジア作家の作品を多数観る。道すがら、ヒンドゥー寺院にも立ち寄り、地元の人々の信仰のあり方も肌で感じた。次に向かった南インドのコチは、ゆったりとした雰囲気のある港町。コチ・ムジリス・ビエンナーレでは、力のある作品に少なからず出会い、スリランカでは、ギャラリーめぐりと作家スタジオ訪問で動きまわる。スリランカでは2009年内戦が終結したが、その後の社会の雰囲気の変化についても話を聞いた。

Pick up Events

特別企画展 | Special Exhibition



“大どろぼう”とは
一体だれなのか!?

来場者が主役になり

“大どろぼう”の正体を突き止める、
没入型エンターテインメントの展覧会

許されざる罪人でありながらも、古今東西の物語に数多く描かれてきた「どろぼう」。超人的な能力者として、謎めいたヒーローとして、時にはおっちょこちょいで親しみのある存在として、人はどろぼうに憧れ、惹かれてしまうのはなぜでしょう。本展は、最後の盗みに出て留守中の、かの有名な「大どろぼう」の家に来場者が忍び込むという設定の、“来場者が主役”の展覧会です。回廊、応接室、隠し部屋など8つの部屋に分けられた展示室には、どろぼうの肖像画や変装道具、さらには著名作家たちの美術品のほか、星、靴下など謎が謎を呼ぶコレクションが並びます。来場者は無事に大どろぼうの家から抜け出て、この家に住む大どろぼうの正体を突き止めることができるでしょうか。

おいでよ!夏の美術館vol.3

大どろぼうの家

Welcome! Summer Art Museum vol.3
The House of the Master Thief

2026.7.9[木]~8.30[日]

会場 企画ギャラリー(7階) 9:30~17:30[最終入場は17:00まで]

※通常の観覧時間と異なります。[会期中無休]

主催:福岡アジア美術館、西日本新聞社、テレビ西日本、西日本新聞イベントサービス 企画協力:ブルーシーブ



コレクション展 | Collection Exhibition アジア美術の歩き方

東アジア編

近さと違いをめぐる旅

2026.4.18[土]~8.30[日]

Asian Art Walk

East Asia: Exploring Proximity and Difference



金サジ[日本/韓国]《双子》2016年



パダムジャヴィン・チョグソム[モンゴル]《夢》1985年



ブー・ホア(ト樺)[中国]《はびこる野蠻》2008年



メイ・ディンイー(梅丁衍)[台湾]《三民主義が中国を統一する》1991年

世界が広がる、 アジアの旅の第一歩

2026年度の福岡アジア美術館では、コレクション展のシリーズ企画として「アジア美術の歩き方」を開催します。本シリーズでは、アジア美術に初めて触れる方にも親しみやすい形で、「東アジア」「南アジア」「東南アジア」の作品と各地の特色をエリアごとにご紹介していきます。最初にフォーカスするのは、複雑な過去の歴史を背負いながら、現在も大きく揺れ動き続けている「東アジア」です。本展では、日本・韓国・北朝鮮・中国・台湾・モンゴルの6か国・地域の作品約60点を、「風土と歴史」「国・地域間の相互関係」「それぞれの社会に生きる個人」という3つの視点から取り上げます。

アジア美術の歩き方 年間パスポート登場

本シリーズ全3つの展覧会が、何度でも楽しめるお得な年間パスポート。近隣のグルメ店と連携して割引などさまざまな特典を受けることができます。年間パスポートで、美術館をもっと気軽に楽しめたい。

[料金]一般1000円/高大生800円

[購入場所]福岡アジア美術館窓口

成果展が
もっと面白くなる！
作家の滞在記
& スタジオレポート

Welcome Artist Cafe FUKUOKA



第25回 アーティスト・イン・レジデンスの成果展

記憶の手ざわり 世界をつなぎとめるために

2026年
3月20日(金・祝)～4月12日(日)
11:00-19:00 ※月曜休館

福岡でさまざまな人と交流しながら3か月間滞在制作した成果発表の場。今回は第2期・第3期のアーティスト4人が同時に展示を行います。「福岡城さくらまつり」と同時期に開催されるため、アート鑑賞の前後にお花見も楽しめます。

EXHIBITION

3期作家のスタジオレポート

Lucas Odahara

小田原ルーカスさん(ブラジル在住)

ルーカスさんは日系ブラジル人ながら、父方に日本のルーツがなく、日系コミュニティの中でどこか距離を感じながら育ってきたという。今回、父方の祖父母が暮らしていた福岡でのレジデンスに参加したのは、そうした複雑な感情と向き合うため。「祖父母の記憶を辿る旅は、私にとって初めての日本を経験することでもあり、懐かしさと新鮮さが同居する不思議な感覚を味わっています」とルーカスさん。作品にはファミリー・ストーリーに加え、自身のアイデンティティを形成する重要な要素・クィア・ストーリーも反映している。三島由紀夫の『禁色』を原作とする舞踏作品からも着想を得た。成果展のメタファーとなるのは「門」。舞台上に設置した門と花道を通りながら小作品を鑑賞する構成にしており、「通過や移動という行為を通して、作品を身体で感じてほしい」と語る。



ARTIST COMMENT

創作過程において、博多座の奈落も見学させていただきました。2か月間の滞在をつづった日記のような作品です。



3期作家のスタジオレポート

Arpita Akhanda

アルピタ・アカンダさん(インド在住)

アルピタさんが今回のレジデンスに参加した理由は3つある。1つは、昨年滞在した京都のレジデンスで西陣織に触れ、久留米絨や博多織の存在を知ったこと。地元インドの伝統織物であるイカットとの文化的なつながりを感じ、強く心惹かれた。2つ目は、豊富なアーカイブを所蔵する福岡アジア美術館でアジア美術を学べること。そして3つ目は、彼女の作品が川と深く関係していることだ。福岡には豊かな川が流れており、街の記憶を収集する器としての役割を果たしている。そうした歴史や文化の交差を織物で表現するため、滞在中は八女や久留米の工房も訪れ、職人たちとの交流を重ねた。「福岡はいい意味で変化の“間(ハザマ)”にある地」とアルピタさん。成果展では、街の過去と現在、都市と自分、記憶と日常など、さまざまなハザマを共有できる場を目指す。



ARTIST COMMENT

両面にイメージが浮かびあがる紙織りの作品展示に加えて、石を使ったパフォーマンスも行いました。



2期作家の活動レポート



Chen Yen-Chi

チェン・イエンチーさん
(台湾在住)

作品制作のためのリサーチで思い出深いことを2つ教えてください。1つは、音と文化を研究する中で、知人家族に昔についてインタビューしたこと。記憶やアイデンティティが私たちの世代とどう結びついているかを考えさせられました。もう1つは、今回の作品を制御するために多くのプログラミングを駆使したことです。



交流イベントで面白かったことを教えてください。「糸島国際芸術祭2025」を訪れた際、出展していた台湾の作家に出会いました。帰国後も交流を続け、私が台湾の彰化で企画している芸術祭にそのアーティストを招くことに。思いがけないつながりが生まれて嬉しかったです。

滞在制作の印象的なエピソードはありますか？

「福岡」をイメージした言葉話し合うワークショップ「まちからはじまる創作」での時間です。参加者たちがとても積極的で、作品づくりについて多くの質問をいただきました。その熱意に心を打たれ、芸術が対話の場となる可能性を改めて実感しました。



あじび RECOMMEND

ワークショップなどの交流イベントを通して、日頃どんな視点から作品の着想を得ているかを教えてくれたイエンチーさん。街で耳にする音や目に映る風景など、私たちが普段見過ごしてしまうものに着目し、街頭での突撃インタビューを重ねながら作品を制作しました。

2期作家の活動レポート

Shindo Fuyuka

進藤冬華さん
(北海道在住)



作品制作のためのリサーチで思い出深いことを2つ教えてください。宮若市の露天坑跡の溜池。ソーラーパネルに囲まれた池で、遺構然としていないのが印象的でした。また、福岡城の石垣と三井三池炭鉱万田坑のレンガを見比べ、壁が石からレンガへと変化していることに、時代と文明の移り変わりを感じました。



交流イベントで面白かったことを教えてください。福岡女子大学とのコラボ企画「私たちは『新たなる自画像』を描きたい!」に参加したことです。学生のみなさんが自分の「こうしたい」に真剣に向き合う様子に、私も何とか応えたいと思い、熱が入りました。

滞在制作の印象的なエピソードはありますか？

一緒に滞在したアーティストとさまざまな対話を重ねながら、間近で制作している様子を見られたことです。プロフェッショナルな創作の姿勢を学べたとともに、自分にもまだまだできることがあると感じました。



あじび RECOMMEND

進藤さんは滞在中、子どもから大人まで誰もが参加できるオープン・スタジオを何度も開催しました。そこで生まれた工作や、小学校訪問時に子どもたちが制作した作品を素材に、福岡から北海道への移住の歴史や当時の暮らしを読み解く作品へと発展させました。

福岡ミュージアム ウィーク2026

2026.5.16[土]～5.24[日]

今年も、「福岡ミュージアムウィーク」が開催！16回目となる今回は、市内16施設が参加し、各施設で多彩なアートイベントを行います。ぜひこの機会に、博物館・美術館にふれてみませんか？

アジアギャラリーは入場無料

コレクション展 アジア美術の歩き方 東アジア編

4.18～8.30, アジアギャラリー, 無料

会期中のイベント

トークイベント

異国の店とアート ～福岡で出会う、まだ見ぬアジア

5.23 14:00～15:30

定員:80名 予約不要・無料
会場:アートカフェ

中国をはじめアジア各国のITを専門とするライター・山谷剛史氏をお招きし、山谷氏が昨年執筆された著書を糸口にトークを行います。身近な異国飯や福岡の中のアジアを掘り下げ、その楽しみ方について伺います。



©山谷剛史/星海社



ギャラリーツアー

ボランティアが、当館コレクション展の案内・解説を行います。

5.18,19,21,22 14:00～14:40

各回定員:15名 当日先着順・無料 ※受付開始13:45～

バックヤードツアー

学芸員が、普段みることができない美術館の裏側を案内します。

5.17,24 14:00～15:00

各回定員:15名 当日先着順・無料 ※受付開始13:00～

アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ

ボランティアが、アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせを行います。

5.16,17,23,24 11:30～12:00,13:00～13:30

各回定員:10組 当日先着順・無料

企画展 Mr.の個展 いつかある晴れた日に、きっとまた会えるでしょう。 4.24～6.21, 企画ギャラリー 一般1,600円/高生1,000円

2026年度年間スケジュール	2026										2027		
	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
企画ギャラリー		休室 4.1～23	Mr.の個展 4.24～6.21		おいでよ! 夏の美術館vol.3 「大どろぼうの家」展 7.9～8.30		休室 8.31～9.18	特別企画展 アジア美術の歩き方 南アジア 特別編			休室 1.12～2.3		
アジアギャラリー		休室 4.1～17	コレクション展 アジア美術の歩き方 東アジア編 4.18～8.30							9.19～1.11		コレクション展 アジア美術の歩き方 東南アジア編 2.4～8.29	
Artist Cafe Fukuoka レジデンス					第1期作家			第1期 成果展 FaN Week 9.19～10.4	第2期作家			第3期作家	

※展覧会タイトル、会期は変更することがあります



福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

<https://faam.city.fukuoka.lg.jp>

あじびニュースvol.99 2026年4月1日発行

企画・編集・発行:福岡アジア美術館 編集・執筆:後藤麻与、片桐絵都

デザイン:吉田朋史[9P] 印刷:株式会社四ヶ所

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リパレインセンタービルA・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで

開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで)

休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日、ただし8月中は無休)

年末・年始(12.26-1.1)

AJIBI News

あじびニュース



アジアの「今」を歩く。

第25回 アーティスト・イン・レジデンスの成果展

記憶の手ざわり 世界をつなぎとめるために

福岡でさまざまな人と交流しながら3か月間滞在制作した成果発表の場。今回は第2期・第3期のアーティスト4人が同時に展示を行います。「福岡城さくらまつり」と同時期に開催されるため、アート鑑賞の前後にお花見も楽しめます。

2026年
3月20日(金・祝)~4月12日(日)
11:00-19:00 ※月曜休館

EXHIBITION

Welcome Artist Cafe FUKUOKA



成果展がもっと面白くなる！
作家の滞在記
& スタジオレポート

2026.5.16[土]~5.24[日]
今年も、「福岡ミュージアムウィーク」が開催！16回目となる今回は、市内16施設が参加し、各施設で多彩なアートイベントを行います。ぜひこの機会に、博物館・美術館にふれてみませんか？
アジアギャラリーは入場無料

福岡ミュージアムウィーク2026

EVENT LINEUP

4.18~8.30, アジアギャラリー, 無料

ギャラリートゥアー
ボランティアが、当館コレクション展の案内・解説を行います。
5.18, 19, 21, 22 14:00~14:40
各回定員: 15名 当日先着順・無料 ※受付開始13:45~

バックヤードトゥアー
学芸員が、普段みることができない美術館の裏側を案内します。
5.17, 24 14:00~15:00
各回定員: 15名 当日先着順・無料 ※受付開始13:00~

アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせ
ボランティアが、アジアの絵本と紙芝居の読み聞かせを行います。
5.16, 17, 23, 24 11:30~12:00, 13:00~13:30
各回定員: 10組 当日先着順・無料

企画展 Mr.の個展 いつかある晴れた日に、きっとまた会えるでしょう。 4.24~6.21, 企画ギャラリー 一般1,600円/高次生1,000円

2026	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	2027	1月	2月	3月
企画ギャラリー		休室 1/18-23	Mr.の個展 4.24~6.21		おいでよ! 夏の美術館vol.3 「大どろぼうの家」展 7.9~8.30		休室 8/31~9/18	特別企画展 アジア美術の歩き方 南アジア 特別編		休室 11/21-23		休室 1/22-23		
アジアギャラリー		休室 1/18-23	コレクション展 アジア美術の歩き方 東アジア編 4.18~8.30				休室 8/31~9/18	コレクション展 アジア美術の歩き方 東南アジア編 9.19~1.11		休室 11/21-23		休室 1/22-23	コレクション展 アジア美術の歩き方 東アジア編 2.4~8.29	
Artist Cafe Fukuoka レジデンス			第1期作家				第1期 成果展 FaN Week 9.19~10.4						第2期作家	第3期作家

※展覧会タイトル、会期は変更することがあります

3期作家のスタジオレポート

Lucas Odahara

小原ルーカスさん (ブラジル在住)
ルーカスさんは日系ブラジル人ながら、父方に日本のルーツがなく、日系コミュニティの中でどこか距離を感じながら育ってきたという。今回、父方の祖父母が暮らしていた福岡でのレジデンスに参加したのは、そうした複雑な感情と向き合うため。「祖父母の記憶を辿る旅は、私にとって初めての日本を経験することでもあり、懐かしさと新鮮さが同居する不思議な感覚を味わっています」とルーカスさん。作品にはファミリーヒストリーに加え、自身のアイデンティティを形成する重要な要素・クワイアヒストリーも反映している。三島由紀夫の「禁色」を原作とする舞踏作品からも着想を得た。成果展のタフターとなるのは「門」。舞台上に設置した門と花道を通りながら小作品を鑑賞する構成にしており、「通過や移動という行為を通して、作品を身体で感じてほしい」と語る。

ARTIST COMMENT

創作過程において、博多産の奈落も見学させていただきました。2か月間の滞在をつづけた日記のような作品です。



3期作家のスタジオレポート

Arpita Akhanda

アルピタ・アカンダさん (インド在住)
アルピタさんが今回のレジデンスに参加した理由は3つある。1つは、昨年滞在した京都のレジデンスで西陣織に触れ、久留米絨や博多織の存在を知ったこと。地元インドの伝統織物であるイカットとの文化的なつながりを感じ、強く心惹かれた。2つ目は、豊富なアーカイブを所蔵する福岡アジア美術館でアジア美術を学ぶこと。そして3つ目は、彼女の作品が川と深く関係していることだ。福岡には豊かな川が流れており、街の記憶を収集する器としての役割を果たしている。そうした歴史や文化の交差を織物で表現するため、滞在中は八女や久留米の工房を訪れ、職人たちとの交流を重ねた。「福岡はいい意味で変化の「間(ハザマ)」にある地」とアルピタさん。成果展では、街の過去と現在、都市と自分、記憶と日常など、さまざまなハザマを共有できる場を目指す。

ARTIST COMMENT

両面にイメージが浮かびあがる紙織りの作品展示に加えて、石を使ったパフォーマンスも行いました。

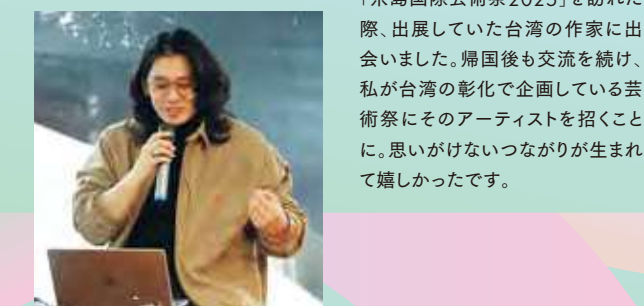


2期作家の活動レポート

Chen Yen-Chi

チェン・イエンチーさん (台湾在住)

作品制作のためのリサーチで思い出深いことを2つ教えてください。1つは、音と文化を研究する中で、知人家族に昔についてインタビューしたことです。記憶やアイデンティティが私たちの世代どう結びついているかを考えさせられました。もう1つは、今回の作品を制御するために多くのプログラミングを駆使したことです。



滞在制作の印象的なエピソードはありますか？「福岡」をイメージした言葉を話し合うワークショップ「まちからはじまる創作」での時間です。参加者たちがとても積極的に、作品づくりについて多くの質問をいただきました。その熱意に心を打たれ、芸術が対話の場となる可能性を改めて実感しました。



あじび RECOMMEND

ワークショップなどの交流イベントを通して、日頃どんな視点から作品の着想を得ているかを教えてくれたイエンチーさん。街で耳にする音や目に映る風景など、私が台湾の彰化で企画している芸術祭にそのアーティストを招くことに。思いがけないつながりが生まれて嬉しかったです。

2期作家の活動レポート

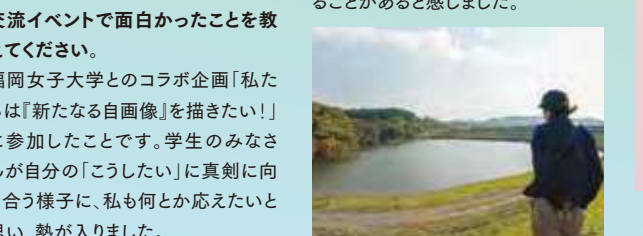
Shindo Fuyuka

進藤冬華さん (北海道在住)

作品制作のためのリサーチで思い出深いことを2つ教えてください。宮若市の露天坑跡の溜池。ソーラーパネルに囲まれた池で、道標然としていない石が印象的でした。また、福岡城の石垣と三井三池炭鉱万田坑のレンガを見比べ、壁が石からレンガへと変化していることに、時代と文明の移り変わりを感じました。



交流イベントで面白かったことを教えてください。福岡女子大学とのコラボ企画「私たちは「新たな自画像」を描きたい！」に参加したことです。学生のみなさんが自分の「こうしたい」に真剣に向き合う様子が、私も何かと応えたいと思い、熱が入りました。



あじび RECOMMEND

進藤さんは滞在中、子どもから大人まで誰もが参加できるオープン・スタジオを何度も開催しました。そこで生まれた工作や、小学校訪問時に子どもたちが制作した作品を素材に、福岡から北海道への移住の歴史や当時の暮らしを読み解く作品へと発展させました。

福岡アジア美術館
Fukuoka Asian Art Museum

〒812-0027 福岡市博多区下川端町3-1リバインセンタービルA・8階 TEL 092-263-1100
7.8F, Riverain Center Bldg., 3-1 Shimokawabata-machi, Hakata-ku, Fukuoka, Japan

ギャラリー観覧時間 9:30-18:00(金曜・土曜は20:00まで) ※ギャラリー入室は閉室30分前まで
開館時間 9:30-19:30(金曜・土曜は20:00まで)
休館日 毎週水曜日(水曜が休日の場合はその翌平日、ただし8月中は無休)
年末・年始(12.26-1.1)

https://faam.city.fukuoka.lg.jp

あじびニュースvol.99 2026年4月1日発行
企画・編集・発行:福岡アジア美術館 編集・執筆:後藤麻与・片桐絵都
デザイン:吉田朋史[9P] 印刷:株式会社四ヶ所

生きる日常を訪ねる
アーティストたちが

学芸員、

今後の展覧会に向けて現地調査へ。
各国作家との交流やアジア美術の現在を4チームがレポートします。

CHINA Team01

佐々木玄太郎 (収集展示係)

上海中心部のレトロな街並み。一階はタバコ・酒、野菜などのお店。

上海ビエンナーレへ、世界との多彩な交わり方を示唆する作品が多数出展。

北京にて、キュレーターのファンボーイ(高博一・2000年度レジデンス研究者)の案内で798芸術区をめぐる。

「AI時代における芸術の自己検証」を掲げた企画「Meme to Jam 2.0」

所蔵作家のリン・ティエンミャオ(林天苗)個展へ。主題は「何もおもしろくない!!」(?!)

発電所をリノベーションしたという上海当代芸術博物館、とにかく大きい。

BANGLADESH, PAKISTAN Team02

五十嵐 理奈 (収集展示係)・柴原 ふみ (交流・教育係)

32年続くカラチの美術館による組織「VASI」の若手メンバーと。

ムガル帝国時代の面影を残すラホール城。祝日は沢山の人が賑わう。

パサントが約20年経りに復活するとあって街全体がお祭りモード。

8年ぶりのバングラデシュ。この間にメトロ、高速道路が建設され、2024年には学生たちによる反政府運動が起き、都市風景もアートをめぐる環境も様変わり。選挙直前の月末は、先行きの不安を抱えながらもテーマを模索し、発表機会を探す作家の姿があった。一方、港街カラチでは新旧アートコレクティブを訪ね、若手の台頭と継承を実感。古都ラホールでは伝統の細密画が現代美術として今も進化中。街は約20年禁止されたパサント(相手の風を落とす嵐あげ大会)復活を控えお祝いムード一色。前日に帰国したが唯一の心残り、いつか観てみたい!

ドコラが有名なパキスタンでは、馬「ドコ馬」に?!

サクッとモチモチな「パスタ」は何にでも合う万能パン。

ラホールの国立美術大学 細密画科の授業風景。貝殻をパレットに使うのが素敵。

COMMENT
8年ぶりのバングラデシュ。この間にメトロ、高速道路が建設され、2024年には学生たちによる反政府運動が起き、都市風景もアートをめぐる環境も様変わり。選挙直前の月末は、先行きの不安を抱えながらもテーマを模索し、発表機会を探す作家の姿があった。一方、港街カラチでは新旧アートコレクティブを訪ね、若手の台頭と継承を実感。古都ラホールでは伝統の細密画が現代美術として今も進化中。街は約20年禁止されたパサント(相手の風を落とす嵐あげ大会)復活を控えお祝いムード一色。前日に帰国したが唯一の心残り、いつか観てみたい!

THAILAND, SINGAPORE, LAOS, CAMBODIA Team03

中尾 智路 (交流・教育係)
桜橋 彩香 (収集展示係)

2013年度レジデンス作家のチェン・サイ・ファンと再会。

タイランド・ビエンナーレinプーケット。ガイドさんが付きっきりで解説。

人生でいちばんおいしかったソムナム。ラオスの路上で出会う。

移動中に見たラオスの夕日。のどかな風景に調査の疲れも癒された。

カンボジア、プノンペンでのガイドは2018年度レジデンス作家のリム・ソクチャンリ。

昨年12月まで滞在していたレジデンス作家のウィリー・サイウウドのギャラリーへ。

昨年12月に開催したばかりのDib Bangkok. あじび所蔵作家ビナリー・サンビッタクの作品発見!

アリン・ルンジャンに教えてもらったパンコクのある寺院。閉ざされた扉の奥には...! 扉がスズガ振動で詳しく教えてくれた。

今回のタイランド・ビエンナーレディレクターのアリン・ルンジャンのタイの@スポットをおすすめしてくれた。

COMMENT
東南アジア4か国5都市を10日間でまわるというハードスケジュール。プーケットとシンガポールではビエンナーレを視察。ラオスとカンボジアでは過去のトリエンナーレ出展作家やレジデンス作家と再会。美術学校やギャラリーにも足を運び、若手作家とのつながりも生まれた。新しい世代の作家を探すとともに、これまであじびが築きあげてきた歴史をたどるような調査旅行になった。作家と一緒に現地ごはんを食べるといった調査の醍醐味。プンポール・ポーティザンのアトリエで飲んだ飲み会コソナツのことは忘れない。

INDIA, SRI LANKA Team04

中尾 智路 (交流・教育係)
佐々木玄太郎 (収集展示係)

インドアートフェアで、福岡アジア美術トリエンナーレ(2014年)出展作家のプラバカル・パーチュペラーに再会!

コロンボのギャラリーで、ミャンマー美術研究者のナター・ジョンソンさんから話を聴く。

一度見ると忘れられない顔。あじび所蔵作家のラヴィンダ・レディの作品。コチにて。

花街のオアシス。カレーとカレーとカレーとカレー。

コロンボ近郊で、所蔵作家のパー・ポッタピティヤのスタジオを訪問、多彩な素材を使っている様子を見て。

COMMENT
10日間でインドとスリランカの計3都市をまわった。最初の目的地・デリーでは、インドアートフェアで南アジア作家の作品を多数観る。道すがら、ヒンドゥー寺院にも立ち寄り、地元の人々の信仰のあり方も肌で感じた。次に向かった南インドのコチは、ゆつりとした雰囲気のある港町。コチ・ムジリス・ビエンナーレでは、力のある作品に少なからず出合い、スリランカでは、ギャラリーめぐりと作家スタジオ訪問で動きまわる。スリランカでは2009年に内戦が終結したが、その後の社会の雰囲気の変化についても話を聞いた。

COMMENT
2026年度の福岡アジア美術館では、コレクション展のシリーズ企画として「アジア美術の歩き方」を開催します。本シリーズでは、アジア美術に初めて触れる方にも親しみやすい形で、「東アジア」「南アジア」「東南アジア」の作品と各地の特色をエリアごとにご紹介していきます。最初にフォーカスするのは、複雑な過去の歴史を背負いながら、現在も大きく揺れ動き続けている「東アジア」です。本展では、日本・韓国・北朝鮮・中国・台湾・モンゴルの6か国・地域の作品約60点を、「風土と歴史」「国・地域間の相互関係」「それぞれの社会に生きる個人」という3つの視点から取り上げます。

東アジア美術の歩き方

東アジア編

近さと違いをめぐる旅

2026.4.18[土]~8.30[日]

Asian Art Walk
East Asia: Exploring Proximity and Difference

COMMENT
2026年度の福岡アジア美術館では、コレクション展のシリーズ企画として「アジア美術の歩き方」を開催します。本シリーズでは、アジア美術に初めて触れる方にも親しみやすい形で、「東アジア」「南アジア」「東南アジア」の作品と各地の特色をエリアごとにご紹介していきます。最初にフォーカスするのは、複雑な過去の歴史を背負いながら、現在も大きく揺れ動き続けている「東アジア」です。本展では、日本・韓国・北朝鮮・中国・台湾・モンゴルの6か国・地域の作品約60点を、「風土と歴史」「国・地域間の相互関係」「それぞれの社会に生きる個人」という3つの視点から取り上げます。

Pick up Events

大どろぼうの家

来場者が主役になり
“大どろぼう”の正体を突き止める、
没入型エンターテインメントの展覧会

許されざる罪人でありながらも、古今東西の物語に数多く描られてきた「どろぼう」。超人的な能力者として、謎めいたヒーローとして、時にはおっちょこちょいで親しみのある存在として、人はどろぼうに憧れ、惹かれてしまうのはなぜでしょう。本展は、最後の盗みから出守中の、かの有名な「大どろぼう」の家に来場者が忍び込むという設定の、“来場者が主役”の展覧会です。回廊、応接室、隠し部屋など8つの部屋に分けられた展示室には、どろぼうの肖像画や変装道具、さらには著名作家たちの美術品のほか、星・松下など謎が謎を呼ぶコソナツが並びます。来場者は無事に大どろぼうの家から抜け出て、この家に住む大どろぼうの正体を突き止めることができます。

おいでよ!夏の美術館vol.3
大どろぼうの家

Welcome! Summer Art Museum vol.3
The House of the Master Thief

2026.7.9[木]~8.30[日]

会場 企画ギャラリー(7階) 9:30~17:30[最終入場は17:00まで]
※通常の観覧時間と異なります。[会期中無休]
主催:福岡アジア美術館、西日本新聞社、テレビ西日本、西日本新聞イベントサービス 企画協力:ブルーシープ

世界が広がる、
アジアの旅の第一歩

アジア美術の歩き方
年間パスポート登場

本シリーズ全3つの展覧会が、何度でも楽しめるお得な年間パスポート。近隣のグルメ店と連携して割引などさまざまな特典を受けることができます。年間パスポートで、美術館をもっと気軽にお楽しみください。

[料金]一般1000円/高生800円
[購入場所]福岡アジア美術館窓口